惺窩文集續　全

ヘ1
4334

惺窩文集續

山之

ヘ1
4334

續惺窩文集序

先儒嘗言文者載道之器也若夫用此而舍彼則可謂買櫝還珠者也不如珠與櫝兩得而後可貴重文與道不綦塞（音綦屮盈貝）而後可嘉尚矣是故君子之樞機非假文器則何以知其德之實雖有文器彙次而非繕寫則豈復見其道之廣哉文器不可離道德道德尚不離文器而後可稱君子者也信乎子思子曰道也者

不可須臾離也可離非道也朱晦翁曰器亦道也道亦器也壁經曰學于古訓乃有獲事不師古以克永世匪說攸聞論語曰行有餘力則以學文是後非文宣王之言耶宜乎雖振古聖賢之書策充棟宇汗牛馬未聞有厭之也先是林羅浮子編纂藤歛夫先生之遺篇而選為五卷予竊敬慕而補益其闕漏而續為三卷亦慮題曰惺窩文集惺窩者先

生之別號也故目之恐流散不能久其傳而命阿叔聊卜取讐挍而授梓人捐餘貲（音資財也）登諸版上而以垂不朽矣大雅曰无念爾祖聿修其德其是之謂乎非先生下世草藁不可不多也惜乎愧雕蟲篆刻取榮後昆繇是集字不留家乘採摭所渙散世間舊什而纔得百中之四五也豈謂靡有遺逸哉復謂靡有魚魯鉏根之繆哉沮落為其美種不熟良可悼

念不能無遺憾也顧寸鐵録逐鹿抄若于紙為初學蒙昧而發揮別行于俗間敢不贅斯矣先生為人惺惚而高明醞藉而通峭自幼好讀書而手口不停絶文編非世叔而有五行之明類季仁而抱三願之癖加之慣元禮簡元之性而待風裁拒交接慕淵明歸去之志而謝官禄甘清閑晩年棲遅於市原之山莊恣情乎丘壑歌秀樂于澗谷之間吟詠

七境致之倭歌而安其安徳其徳樂其樂所謂隠居以求其志行義以達其道吾於先生見之或流連風景陶寫性靈釋智遺形幽歡流暢超脫塵俗或逢一時偶一事泛若虚舟觸物曽莫知指遇之所由生涯清貧而無物所居環堵松棚竹籬蕭然小把第而已具公輔之器懐匡濟之畧而位不満才蘊未究施情溢為文為詩為歌志見于詞章其作

窕而擸其究遺而適彼所謂與視肉撮
囊之徒耳食奔競之士吻貴紙上語而
弄三寸柔翰呫呫而儺拔術役役而占
便宜者不可同年而語矣熟得繙閱則
如在其時親見乎其事使吾喜使吾悲
使吾鼓舞未既而繼之以歎且泣也其
人已沒其神日新其行愈遠其名益彰
其文茲明其德惟馨彝倫攸斁不有儁
傑陰柱其頽則教化將奄奄不復振遁

起風俗之衰而所以吾道鼎盛者非先
生之力而何然則嚮之所謂道德文器
者可舍諸可用諸信邪詐邪一乎不一
乎學者宜思之若先生者可謂玉其德
而韞匵而藏諸先生惟不矜闔國莫與
先生爭功能丕績不可殫述焉士君子
擧揚而稱之寔天授之一畸人矣乎予西
蜀人也幸與先生生同地居同世歩先
生二十歲弱植弗類不能竭齒牙閒字

念八時就傳京師從先生而受六經五書三史文選離騷通鑑老莊韓柳李杜之書而粗問其理義蓋十有二年時時呼置客齋而提焉予於先生一日不見如三秋兮一旦新構陋室招先生先生親寫生白二大字且爲之記而以扁之又爲書格銘而以賜之同生云乎哉同居云乎哉受書云乎哉年歲云乎哉親炙云乎哉耳提云乎哉伯魚於孔子不

聞有異聞君子遠其子況他人乎況凡庸乎而今有黃口乳臭狡黠姦邪漸毒頡滑之流輩遊其藩垣而不求其堂奥而僞其學誑其君欺其友私其師而不耻於自售者孰與假安屈指而擬聖賢貽毀於後代宗不遜之甚是小人之常也君子可發一笑先生之於門人猶如明鏡之於萬物猶如巨鐘之於寸莛美惡之去來照影從焉大小之考擊鳴響

應焉嗟夫別先生九年于此矣予將疇依毎臆之而若手澤尚新也其生平行履爵里氏族共備藤氏之家譜及畏友之行狀暨序文也不敏陸陸何敢爲贅疣豈復爲添足皆

寛永紀號之四禩歲在強圉單閼橘之余月慈來之日後學士師氏玄同子德謹書于洛陽二條坊烏丸生白室之僑寓

惺窩稿續卷一

菅玄同編輯

○五事之難

一天道

二災難

三因果

四有正直而貧賤者有邪曲而富貴者

五惡人之榮

一曰夫天道者理也此理在天未賦於物曰天道此理具於人心未應於事曰性性亦理也

蓋仁義禮智之性與夫元亨利貞之天道異名而其實一也凡人順理則天道在其中而天人如一者也徇欲則人欲勝其德而天是天人是人也是故君子用力以知得乎天命之實理小人肆欲而不知近乎禽獸中庸曰致中和天地位焉萬物育焉實以我之心而通天地之心則範圍有道而天地自我位焉以我之心而通萬物之心則曲成有道而萬物自我育焉惟不是子思子貢亦曰夫子之文章可得而聞也夫子之言性與天道不可得而聞也是即理与天道所無二之徵也今擧此二説以對言之者也

二

曰災難者吉祥之對也此其是非善悪小大得失亦皆如此也茲在人將自室到堂掛于屋牆之團扇偶然下而中人之頭上是小災也小災也者小変也將下堂出門揩于門上之瓦石遽然轉來而傷人之顛頂是大災也大災也者大変也此天之所為欲人之所為欲蓋天之所為者我之所為我之所為者天之所為也然此変未知自何處來者也書曰

天道福善禍淫降災於君以彰厥罪然則大小之災祥皆在乎己而依然不離其身者也如夫天変者亦災也日月之食地振疾風等是也蓋上天當於此小変而遂不共其所孔子阨於陳蔡之間而是亦小災而遂盡其正命者也夫天地之間人物共有変有災但変者將変而未終禍者也災者既成而有跡者也故君子不防微而已変而巽辞以謝君子過而知改豈終于禍歴代思堯舜禹湯文武周公至孔顔子思孟子等有小変而無大変矣其餘假仁義而好霸業者與用夫權謀術數以說人者皆遭大變或被罪或為天下之大戮矣此所謂自所召之致也此以書墨揭之

三曰因果之字義未詳說文因託也緣也又猶根本果與菓同凡有木之根本者必結其實因彼來此之謂也譬如茲在人昨日盗人之物而今日遭害者昨是因而今即果也又列朝之士以加無礼於此則己亦以報無礼於彼加於人因而見報於人果也是出乎爾者

反乎爾之義也乎今論其虛遠則過去因而
現在是果也既語其淺近則動靜云為日用
語默之中而有因有果有善有惡孰可不敬
畏之哉此借孟子之辭以私考之未知其可
否

四曰有平直而貧賤者有邪曲而富貴者凡平
直者近乎義故常知羞於已而未知走於利
是以必不富矣邪曲者溺乎欲故日夜處於
汚穢而放於利是故必富矣陽虎曰為富不
仁矣為仁不富矣孟軻氏曰雞鳴而起孳孳
為善者舜之徒也雞鳴而起孳孳為利者蹠
之徒也正直而依於仁義者豈獨舜以為聖
也邪曲而走於利欲者豈惟蹠以為賊也是
故邪曲者必富矣正直者必不富矣或曰然
則舜亦有邪曲乎曰舜當常天已定且得氣
之最通正以乘乎時日吉星之運故聖而富
矣如夫邪曲者亦幸乘乎時日吉星之運而
當變天未定且得氣之偏塞故邪曲而富矣
亦就人事以論之一以日月星辰之向背而
推之

五日觀悪人之顯榮莫大乎夏桀殷紂此亦畢
乗乎年月吉星之運然偏塞之氣及邪悪之
氣最重而正通之氣最輕故有禄無德矣實
由擧消而充益明也桀紂擧滅而顯榮本
盛也此隂陽消長吉凶禍福人事得失之定
理也以此推之則天下善悪之人尊卑大小
倶然也詳察此五事之難皆出乎賢聖之言
外而其理甚精微也今領
命以不得已而聊述其大概也者必多差誤而
已實聖人之罪人也

君臣之事

夫君臣ハ臣下ハ賢者をえらんで明らかにさ
をそへ信あるものに禄をあたへすべて
心をつくさしめ下信よりをもつてまつりごとをおこなふ
是をもつて君臣和合する時ハ治まりて臣ハ君の
明徳をみとめ恭しく敬をいたしてつかへ奉る
まつりごとを恐るゝ人ハ其政をしらしめ百官以下此
善悪を察して窮に君を遠ざけ人を用る賢

ときよふすへからんいふへからずは下ふやさき
國民乃賦税をも少薄くせを薄則ゆたかなるへし
三年此うち厚とらふあらす厚利國三
年の内うちく取ふあるへきを如此にして
先民をはくゝむのかとし其上ふほとこし
君と臣と道を論し義を正しむる乃孫
侯乃忠不忠を察し如此あらハ吉祥日々に
あらはれて國治り天下やすからんとある

如此あらハ兵乱不起ふ發して天下ゆたかなる
危からん也とも此安危乃二を君臣の心え
中ふ置て終夜寝ずして終日食をせず家中
天下の平ふならんことを祈るあらハ君明
ひかりふなりて臣君ゆたりつゝ事々を識る
なるとて文君くらくとも臣をうとさすくす
毎三いさめん君を一励まず諌むとも
きかずは一励とも不行後ふ一旦の計を以て

民乃物を剥取君にあたへる所以良臣とし
日夜に機變の巧をめくらし君に諂を
いるゝ忠者と賢者とをそしる時ハ主益々まよひて
亡ぬ然則臣見機其君を亡して主姓の
臣となりしにさる家の故ある時ハ其身を
報ひ位を下て禄を薄くして政事を
いたす是逆徳の臣なり高くして修己以後令
此を同姓貴戚乃臣と云是君臣に義ある民

ところなる也

父子之事

凡父なる者子を恵むハ天道之自然也
恵せられんハ何以父と云へきや恵する事
道ありて能子に物をあたへ智深徳をもつ
をしへて君の徳をしり天下の政道を守よ
身を守るべし以て臣乃恵と忠を従に
まかせて理を以てあひせすハ時ハ彼ある歟

乃こゝろをもち杜牛此をのゝ子を称ふ
陶りしらすふ是おゝすけ只世間乃人皆綾芸ふ
倍るまおちくて無能ふして信さくやらぬ綾
數多さは貴も綾も皆天下ぬ補相となる
ならへむして無能別皆人乃子下信ふ称せ
賤きの子及て上ニ信ふ登る彼賞をもへ与ふも
無能則何をかいく天下をえられんや
此綾をいへとも有能則天下をも補相となるふ

やなり是をゆるさをしへ給ふとの聞ニ於
是父ふ乃親を放す敵乃湯王ハ是太子を
民間ふおしそ民乃辛苦を知り給ふ周公ハ
伯禽をそだてまする此識ふ子を思ふ乃親を
文子ゝの父ふ孝を尽すを亦天賤乃同
孫や無孝ハ何をゆるく〳〵ふ色々んや孝を
なすふ道おゝ只親を養ひ労ふならさる
誰もとりふや養ひハ大なるまそのふいとふ敬

せうとハ何をもつて孝といはんや凡人の子
たる者親を敬ふ乃あまりを以て身を立
道を行ひ己か名を天下に挙則其親甚
悦甚悦則これより大なるハなし是を孝
乃孝とす是故に舜の孝ハ四海に達し
武王の孝ハ天下に通す此を父子乃みち
とむとそ

夫婦之事

蓋夫婦者天地乃ことし天ハ地のほかをつゝ
地ハ天の中に事ふ懐孕の始に男ハ外を
いとなみ女ハ内を調る文王乃后妃葛覃乃
中谷にをひて其葉の茂せるをひろひその
葛をとりて外に渡し絺綌の衣を織るを
をも成ひとの安からむことをおもひ給へり文王も
又天下乃民とともに甚苦勞し民乃安きを
みるも性備りて其ととのへり是文王ハ外を

けるゆゑこそ婦ハ内を調へまさせ夫婦の於
おさまりて天下も政国乃うちよりいで
万邦自然よ風化し民をさく其所を得
たるべし然ハ夫婦ハ別あるべき也

兄弟之事

それ兄弟ハ天より次第をさだめおきしと
也雖然兄弟なかよくして兄ハ弟を
慈愛し弟ハ兄を尊敬す其郷黨隣里

よりも國に及て必法となす然則兄
弟乃敬するより起て國治るのもと兄を
兄弟に敦あるべし

朋友之事

夫朋友ハ他人也他人と交る何以四の倫の
内にいるや父子兄弟の間にをいて自ら
ありとはいへども他人にかはらんことをもつてか
己の情なきを伸るらんや是以四なき物に

なり是を加へて五倫と号す朋友ハ信あるを
以て朋友とし又互乃是非を諫あひて益
あるを寂交しらさとも朋友ハ義を
以て合ふものゆへ朋友に非ある時再三諫て
うけざるときハすへからく其人除をつけさる
忘をむすひをよく諫ていさめをせしに
その隔て疏その厭親しみを求めて交て
践せらるゝ是ハ義もなく信もなき朋友也

かくのごとくかなる者をこそ友とすへからず
故莫逆をよく辨て信ある者を友とせよ是
を朋友に信ありといふ也

嫡子并庶子之事

或人云嫡子とは重んし庶子を軽しむる事古
よりの事なり男子は妻も妾も共に我婦也
切なるくいふべしかるに親族の内にいふ事
幾らもるをも猿祖の子をまうし豎子か婢腹より

まこと卓ろくれたるを出して聡明なる人の多
器量才能次第にくはしくきこえありて
なりぬ能作らんと云ふなり曰婦子ハ天地交
泰の徳によりわかく生ずと夫婦の世配なれハ
亦天也彼妾婦ハ侍女乃たぐひなるを以
夫婦の正對にはひとへなんや是故に婦子ハ
重く庶子ハ輕し然れども天子の君といへ
公卿大夫乃嫡庶等にいたるまで十人なれ

皆大学に入て理をきはめ心を正し己を
修めん人を治むるの道を以て教へ行はるゝを
子なきときハ天子乃位につかしむ同天子の
庶子達ハ國に封じて諸侯とす又公卿
大夫乃嫡子も其家を繼く庶子ハ其家に
とゞまりて或ハ天子に仕へ或ハ諸侯に仕へ
別に家をおこし是を以てこれを治る是天倫
をそむきて庶子をたつとく重くし嫡子を輕くせんや

若色に溺て人意をうしなひて私に計則
綱紀乱て人道うしなふ事大人たらざれ
ハ可不慎乎

女子之事

夫女ハ其章ありて男子とことなる事是
あるにて女に三従とハいかなるをかいふ幼
稚乃時ハ親にしたがひ嫁ての時ハ男にしたがひ
老てハ子にしたがふ是故に人君たる人女子を

師傅とて女乃師道をつとめ甚おもくをしへ
於く婦をもてをしへて聊も人の見ぬ所やう
にて師傅なくして教へ佐せ或人曰その
師なきをもて人を女子の成習ふやいかく
関雎乃篇をもつてをしへ候夫関雎ハ后
妃の徳夫婦和合のさまや彼関雎と云ふ雎鳩
河乃洲に和鳴して男先に唱へ女後に順ふ
是夫婦之別也彼雎ハ女をよそはんとすれハ後を

以て女子の道とすいはんや凡女子生れてに嫁して父母に孝をなすより易裏行楽て楽し哀く備るへからんや男九あらかよう
て易押者ハ女男乃情也白桐芸に和楽して敬ひ其貞しく淑して一を守れとうるかハ
これを以て婦人の道とす三月桃の夭々たる時ハ男女必す會里女子男れ家へ行て結一家の中をなすかりき一家乃内をおさむる時ハ

其法国にをよふ時ハ其国治るといふまても教訓を以女子をそだてりハ男乃法也

妾婦之事

蓋大夫たる者ハ妾婦二人士たるものハ一人然れとも婢妾妾婢之ならて此理を知ねハ時ハ大夫ハ国をうしなひ小人ハ家を破るとを昔周幽王ハ嬖に其本妻妾妾婦を寵し太子をうとみて廃太子をせさりしによりて

大戒殺して又子もなし持りかへし叩くける
妾婦を持く其身をおとすものあり僭
年等是や只以婦為婦以妾為妾とのく
定めにまつるひを冝ふ合とさんハ何の
あやまられあらんや婦乃字を女へんに帚ハ女
箒ふ帚也といふ字なれハ彼婦婦ハ其
帚をもちてよく家をきよめて家をもたせる
事故也是ハ婦乃道也妾の字をきれハ

女篇に立といふ字也此妾婦乃務とりては
我ハ是侍女乃ごとくひたすら侍御をなす役
乃身とおもひめぐらし必帚を取て家をきよめ
手く必家をも治て子孫永年所なるべき事
なりハ侍女の心也此婦妾乃二字を以ても
心得へし人皆良知深く万事の不変無色
良錯たるまじく行ふて天下の人乃心をも
忘るなかれんやなんや彼妾婦の計りとやきさ

ことゝや

交隣國之事

夫國に大小あり大なるハ小をいつくしミ小ハ大に事
ふ是必ず然之理也今己之國大にして
人乃為小なる時ハ能人恐れ小國をめくまん
人の國大にして己か國小なる時ハ能大に事ま
つかふるなりとして交る式人云如此り
すへく何益あらや曰己之國大にして人の

小國をせめて得ん時ハ彼小國の喜ふも進之
憂ふも進む此二ツは天理之自然大小之
勢理の当然を以て交ることハ天乃ハ他あ
らすなれ天下をすへうへけんや己小國
定とせへとも其他潮とに積て天下の者
皆小國乃徳を慕ひて各帰服すること宜へ交
かくて大國も反て我小國にしかんや之ほ
とや然則天下何我にまけて仍らんや敵乃

湯王ハ小国を以て大国につく仁政乃地を
とりて天下をたもち又周文王もまた
小国を以て大国につく仁政の地をなして
天下をうちとらへ給ふ是等ニあり其ハ勤也
吾道にかなつて国と交り隣国大小ハやかに
及ばゞ天下皆服して吾ハ堯舜となり
民も亦堯舜の民となりて此交りを既に
先王如此ニして小国をもて世をおさめして

大國ニちかつて巧をめくらし給ふ人の
國をとらへ天下をも奪ひとすらむとおもはす
是天理乃自然礼にあへる儀則也如此則
必天下を得へし縦ひ其一代ニえすとも
明らかに子孫天下を治むへし是を隣国
に交る吾人を待乃礼といふ

隠居之事

丈夫ハ二十にして冠し三十にして妻を

賢ハ五十にして仕へ七十にして官を
致し遁世乃ことを身をやすくして好む
を隠居と云ふ去とも其人の能あるときハ
朝廷より杖を賜りて又祭りにて論道
講義にてそれや八九十歳に及びて朝廷
乃杖つくよりも敬る時ハ天子自ら其の
屋へ御幸なりて其事をとひ給ふ也
これを隠居といふもんや　彼高山の四皓

避世箕山乃許由乃隠居ハ是論ニ及はず然とも
是ハ君臣各其能ありて道乃行るゝ時忠
事なきゆへ天下道の興るも廃るも人ニ寄
乃可否と天地の盈虚人の力の及ざる事
然るに如此なる時ハ深く世を逃れて隠居
するとも可也後漢蒋詡之幽居劉禹錫之
陋室何とてゆかしき事なれハ学ひて
又よしあらす丈三径のかまは桃遁陋室之

中にハ玄白丁東籬のもとにハ松菊径
存楊樂乃園にハ明月時にいたり清風自来
此時に懐ある者と酒を挙て琴を弾
先生此道を論し天道一致乃奥妙を
人に得天年を終ふるの説も移りく
きうの形るへし髭を隠居とついて可
平頌右節日乃十條四書詩礼等の中
を以て答なせ尸せむへとをとせし乃

ゆうかりしきうあらて、行く尸ト山僧
なるとのみにて大形乃善浄確なくは

惺窩藁續巻之一終

惺窩和歌集續巻二

菅玄同編輯

長嘯子よみ給

庭乃雨ふりけり麦をほすしつれ
世をあへぬまてゆふたちのかせん

答長嘯子

麦よ〳〵ほしてん人の昔ハ夜の雨ハ
あらふるとしを梅こそんそしきむ

今の庭乃雨にも海に飛泳くまゝに
はに落ちてはいとゞ紛らめと
雨と人乃声もきこえぬとつ里
をおもふに今さへと猿の声れ明
なからむ枕の月を入とさしらく
冬とも水に寝しはをなしとは
らす

かすむ麦を梅にかきれる露庵雨に
かゝりむかしの心よさられけり

長嘯子

面影の戸れおもかけ伏なかの夜は
まくらをとふれ月まれすしらぬ

返し

いつを折とへて折ふすの月乃月も
うつ面におもふや世をさけ

依風知梅

むもと猿さかくにもはくさむめ
みかひりこを隣よりれもる風

柳先花緑

春乃ひのさみどりの糸のいろてハおれど
ちかよりもさきそめぬるもあるかな
云門のりとかは華逝窓日録ゆ絡也
出るし夜いそ悔してあり出
好けきえこきくすみうきまし
人のおもれも華逝れまとのあみなり
打ちよしちろをそ斉しつかとよ出

萩似人来

人をおと萩乃うつ葉のそよほしらお
ひろうしけのをと葉の出かいうるよ

草花非一

植置しはかな乃るすき人八千種り
秋のちくれ多すみそうなて

秋夕備心

さむしいの秋乃いつうつかすみん
ゆふ見をとやよするう流うるり

紅葉一樹

錦きるにかゝ乃くしぐるゝ立田姫
まとひやすらふそのかさねひして

江暮雪

くれぬ間もたえてする白妙の
やどは江のあしの葉末の下をれ

雨中竹

世の中をうきふしなしや竹のめでたさも
枝のかるなかれ秋のたてきかん

獨述懐

ちらからねの草葉にうつむ谷乃蔭
まりらのをなをさつ霜の枝ならも

壮年述懐

身とりしるましくとしれ秋もなし
わりわすかうらみの雲乃あるゝ小田

老後述懐

身を老とへぬそをひめるもすそなら
人の人なるみち身をいかなる世かし

寄日懐舊

てらしつくふ乃いらぞとらくゝけ
んよあけよ、いかんのみそらし雄

寄月懐舊

秋ことの於すしなうかんをと陰うゝや
むかしふとそれ月らおもとぞゆし

寄硯懐舊

ととりとのこ上かなりとそら少そ於とふか
らう色乃み此のとちもて
諸らすてらわうひかそて流もとは

いろなきそらすゝみとめこそ

題しらす

松乃葉ふうる小月をまちて神のふ
ゆみちれ秋のこゝろのみ、は
ぬかゆくんをおくふをくきしを
つれし神のよろこびさくらや
わかれとも春作のことはゆくこのか
乃なき作いそえすこてら
ようゆらむこその世きうらよふつ八偏

ゆきかへてかはとくもあましかは
わたりかねよるのまのうへかはとくり
小笠のはるかすそをとをくる哉ん
山家にたえせてかなしさにかなしき
さくらさみそてとふかとそぬ山さくら乃
わかきねの柳露れはこそなれ
ところへこゝろへたのあかつき
まちつけてくる時あらん
のりへみて待かつけなる

なかきよのんをも月すらみ
ねさめいくへれ山乃ねさめに

旅泊にある

ともそせそていつかはたとゝまの
うき身の旅ねちかうなるら

待戀

わするなやちきりぬ夢のゆくへ
あしたの雲れゆふくれ乃かなしみ

述懐

まつしせにおもへそらさぬ身ハいつれ
いはくの山のちけのゆくえや
人そつかおひやうしてかうれこの
たてるのすそはのかなみにも
人乃腽肭臍をとうかもうくから
とのつかをよ
うせしはるとわけ望せらくハつゐん
きみかいのちのかうくさうき
著ちてす

あきうとふ衣のくく海やくひらをうちらて
ほとゝきすくゆるのむかしさ

九月盡雨

おしやさ葉切秋乃名よの雨よ
からそ行くあきうつくはもかみそ

歳暮

いつまてかつりきもつきんとれとそて
井しぬハおとうふをおふもいつかか
恋やハいふくさうあうあのハさうなるさ

らしとそ見ゆるこゝろまよくさめと

立春

春やまつきぬらん門のうちに明て
たつくものみのくらゐもしらく
佐保姫や花乃ころもをきつけそめ
あさなけの雲のたえまもみえん

春日山

かすか山みねのまつふみ道わけの春乃
ちらをつゆとやくの家乃風

七宵月に笠乃山のくさまくら
夢かうつゝかたちもしぬそら
むすふ川せゞやまのかりやとりも
かたうけしむれ緋乃むしろさ
中院也足軒にまかりての懐を
のへられてまとはせしをとて　贈答
九月まつや
ちたりける旅も秋さくひの秋の露の
みえをとらへにかけのみゆるを

讃府へくたりけるまかりて
命ならはせのうちはあはん浮ちの
よそにすくぬるのとらるゝさうれし
同晦日れおくりての日
むかしをこひ侍りしに猶むかしむ
ふるかへつる人乃子のなき人
十月朔日をいたす日
大宮殿にまうかしなく人乃わかれの
袖よりつゆくらしくさきるか

くらみよこれなしなかなきらぬ
なかさこともいはせてあかさせ
みかゆ行やなきさあかむまれしを
みはまちなるんみはちよなき
まつはおもふはよにけぬせのうこと
さや行をそへんおもひよのつま
同し夜のおもつき
かなしさのみをそよなき乃ほよすら
いをとゝのゆふをむまかつらへは

わかれとてとゝむるならねとはかなくもいひ
かはしことははかなしきを

二日

なをさりのよかりけらすはかくとせは
こよひのうちにそふのゆめをまん

同夜

いかにせんおもひもやみにねられぬを
ちきれ乃枝も三更あかつき

三日夕くれ

かゝらむも心よの紫におもひなし
ほけいてしまれ庭乃ちおうら
うつるよわをせんなのか忘草
いさうそしなるとうさもかくみを

四日陽明乃御歌の御和

ちりて葉もおしれもかいつこゝり
かゝしや涙をうちぬ乃ふかうと
多の袖とくれやうやま乃かや老
むつふみんとう千代の志て菊

五日夜よられ文をみて

そのまゝに思ひつゝの袖の色からら
かゝるよるべのしぐれさ乃なと

八日

ちりつもる人をまつにはとはれつゝ
いなおほせの花はちてそまつ
御しをとふらふ貝拾ひ
つねなくおもひわかれのかひやれ
ふる二見のうらかひすなか

文

ゆふくれはものおもふことのはにおもふ
ゆふにけふ雲のよそにへなりて
愚裏
よしやそのことかたえても花ちるの
つらきおもひしのけれはいそ
以上二 贈答也 足軒也
平月續 市原山莊之景其數七
いくたひも雲のよそやまもらん
わかれもしらぬ水乃月にうき

流六渓

渓川やなかれまかしるのからん
六乃しるしきりえさえなきと

洗竅科

おちのみするいのかくして吟聲
みすかゝる非もなくしを

釣斧松

聲れ音かくまてや斧のこゑ川らたえ
この山りのれきのまつかせ

北闕峯

つきや向背ありまかん人も我も
わ乃おもりいの山のそらかな

岩牆

いそ吟さや水のたれのかくはこなんね
せ乃あらゆきよへてそてをてふ

枕流洞

うつ孫のまくかすることかくさの
みなれ洞を出秋もかし

玄同妻におくれし時

なをそもうくれとおもひいでて
わか衣のつまとやなかなか
世をうちすさみ侍るおりをしも
よみおつけてよめるうたあれは
よみてつかはしけるのみ
なきもかくわかよはひさとかひ
老らくをおもふまもあらん
行ことはすみせしくしもいかに

かへすやへあるへきにしきいろそめ
やへかさねつまさすらのふらのかう
しへやよるのくすくれつれ
いろかすもてしやあらんとするの
こりくをたてやもとみてみせい
はくの葉乃しこをはしおともかと
さやく露東やあさのをつね

寄恋す

世にふるやはかなきもうら哀の

月のゆく清にくまむしろ乃也ん

花經晴水

ちるうかのそこさくかとのうき雲

夢路もかわる乃うきね

八月十五夜

めくりきぬ月をやまためくりあふよも

いかにはこよひ秋乃ま中ん

春雨

はるもしらぬ世にまつちるらん山里を

うるふまのさむころ乃けふ雨

紀侯あまおとむしこし時山中の村に

やどりけるときに海より月のぼりける

をりに

雲ふりのまをまちの葉にうつ月はかはらね

さそひやこれ世にもとみめくるあとを

燈花　甲寅正月十八日

梅こそみなれ八ゆきのへとうれし火の

たれよりもちからそありしすゝける

みか人へ雲の衣やいかくらむ
いとゞ秋ふかきともし火の影

題しらず

あらしせのなきさをしばし山かぜに
雲かくれゆく月を見るかな
雨のなごりはおもひしもせめて猶
ともしびのひかりなきひかりおもひきや

中秋雨

世をそむくいかゞの空ちる月もなし

ちぎりしをあはれ夜乃あかん

歳暮にけるへのしるしつかりきる

題しらず

人乃世はなきをも行かくる身の暮れ乃
いのちにまかせおもひてやまあと
なきともおもふてくもりけりそ候は
さりとあはれぬ世とはまさりなや

哀傷題しらず

あらのあはれよりひとの色そ秋の世や

吹上乃さくれ多きうめし
おとひとふ人のまとけの多めに出て
うきし紅葉乃色もこぼれて
口すおまち九年とていかつ月あん
ひらのうちをとなかりきらん
あらし日ハおよむてあをくらの
くさやもきそん露とこそても
いとはらしと一よの色やしらぬ
あきさくれのそきもつこそを

又さくひとくなき弥乃なをつくさ
さくあはくれはらくしもせす
時しもおきちるやかかるの花乃色ハ
何かむ秋の月に乃さやく
數くそなく音ハおきかきものよ絵
をさもみなこのうみよなうつよ
友ノよ色をうて秋に於もひいろう
いつなと時き和宗のうろなを
なきへのかもらつき乃なか 枕て

うゑしまするやかきとこのまん

桐雲幻菴上人むかしさつし
をきくるゝめすおとつれて
紫乃をいゑてをくるふとてはこそ
つくしの夜すかし清水ちろりを
下紐をといきふとてよめれ
てのやつこあしのぬらきのへいさて
つゝかぬさしいつゝかあらよき

夏月

夏乃夜のむしのよいくすてこゑぬ
ちかりをとうらふかみの月こうけ

暁てす

暁乃間の雨ふらふか乃と魚をおくこ
そらよしかといかしぬつきさきを

落丁ニ依リ筆寫ス
昭一五、二、六、
井下

惺窩藁續巻之三

菅玄同編輯

題菊花圖荅姜沆

嘗聞栽菊地仙家短世頽齡相制遐不變清容今見畫三秋花是四時花

數莖芳菊色交奇姜氏新題亦自宜節義秋高風露底對花可道是吾師

小格銘

夫是讀書又猶磨鏡除垢照形窮理盡性所爲

雖同成効或更有暗有明惟狂惟聖此埜豈徒
讀書在敬。

大明之使節來朝予也侍
本朝相國公幕下卑陋小臣也爲諳識荊
之好請床下賦小律述野懷蓋以不通語
語故也　勿怪恐咲
棹舩千萬里回首兩三台且作倭人喜仰看明
客來出郷吟白雪此地送黄梅歇語音聲別小
詩愧不才

寒爐燒葉　左武衛源公　席上當座會者數
歎炭烏銀活火紅官家不覺九冬中歸來自適
山房夕爐底燒殘葉落風
木の葉ちる此ころさむき衣手のうへかれ木は焼をさそふ

獻　陽明殿下
九堪輿之間山之大者莫五岳之如而挺然乎
五岳之中者是曰泰山一曰岱宗爲群岳之長
也曰天孫爲天帝孫也登而小天下者仲尼也
覧而小衆山者少陵也蓋其至高者可觀矣枝
峰蔓巒豈差肩於其間乎任千岩万壑之尊者
無異論矣夫日出處國天兒屋根命之嫡裔内

丞相鎌足公右僕射淡海公之橋梓者
楓宸羽儀藤家鼻祖也爾來遞遞華冑命作手
接家代居三師位接萬機政兼公門九鼎之寄
爲其任重哉就中
陽明殿下爲五家之宗而百僚之奉萬民之表
也所謂五岳之在岱宗猶五家之在殿下矣
詩曰泰山岩岩魯邦所瞻殿下内府君秊富春
秋他後朙年魁外積德如山覆簣弗止而底于
成則將爲天下之所瞻豈止魯邦而已哉泰山
而已哉孰弗御望也耶可尚焉　内府君爲

人天資聰敏敏而惟學是嗜能眞字假字書而
祖述道風佐理之楷法諳長歌短歌集而師表
定家雅經之英詞究其壺奥摭其精微風花雪
月之華江山雲烟之美擧寓之於毫楮之際出
語驚人人皆絶嘆焉加旃經史于壁隱之窓子
集于燈雨之床造顛未嘗不留意於此矣實君
子無須臾而不學之謂乎偶者東討西討聚書
殆充棟宇牙籤玉軸琅琅然璨璨焉雖張華之
三十車丁顗之八千卷不可多讓焉烏乎方今
叔末之世世衰俗薄而聖賢之道墜如土所嘆唏

也扶顛持危彌縫其闕逮墜其沉而篤前人成
烈者非殿下而誰歟可謂濁世佳公子也豨
是前右府信長公視猶子推擬過眞因馬之
逢伯樂劍之遇薛燭者可併按奇哉
殿下自今研精覃思年彌高而德彌邵燀赫日
神之餘究於桑域激淡海公之末流於菅原仁
行洋溢威名隆盛盛作文章司命人物權衡黼
黻
朝庭衣被國家而恩風風人惠雨雨人則必曰
偏天下者惟泰山之雲也遠者大者視望在茲
矣僕辱接刺謁見蒙鄭重顧遇者非常之恩榮
也雖不勝屛營之至綴川八句一篇獻
殿下奉祝前程云爾台覽軒渠
世系五兼春日神本朝貴族更無倫巍冠屢譙
唐虞德文務常談周孔仁顯若仰之如泰華翕
然歸者似岐國他時必接萬機政恩澤普霑天
下人

文祿乙未之孟夏法印梅菴老人受
相公之台命爲湯浴治病將赴馬山發伏
見之日賦二十韻詩記一時之實而求友

社中之和以字不爲無似見示又迅筆書
之答
朗吟瀟洒新詩句雋永無窮將及唐奇然驀地
俗情去恍爾一時喜氣揚風騷壇上士常少不
雅識中誰敢望學術從來因有在佳名亦自不
曾藏祖公磁石如於鉄斯老葵花似向陽頃
識蒼姫魚腹王更逢伯樂焉精房乃聞伏見盡
華美却見京師依末究萬代雄基窮智巧四夷
包貢盡心腸尋常藍尾宴遊酒兩部樂聲上下
堂月落江心全璧碎風吹帆腹一弓長消閑坐
隱楸枰上入夢潤泉茶竈傍卅觀築山添絶景
深瀨建等映離墻每逢逆與意皆適尚愼典刑
威益彰門外森嚴兵衛戟塵中倒臥訟庭衙維
時槐影既迎夏荒圃麥穮先滿場唯頼吾人須
極樂又知天地欲呈祥天地呈祥吾人樂餘恩
加處泳蒹翔衹今染病是非病憂國憂民鬓亦
霜慱愛平生無貴賤往還絡繹不嫌忙濕潤德
量堪兼氣不須磐石沸成湯
　浮屠氏日習持旧題之草藁去或人游
筆和焉見其字畫一波一發之間風神蕭

散略可愛雖未接眉睫推知其為人遠客
之牽有在故再疊前韻書以與之供至剏
百年退宅又浮家行李蕭然烟雨中不意小春
春已動筆頭變子著斯巻

無題

衆客風帆影遠浮誰欲相待倚沙洲曾周水陸
今宵労山對蒼顔波白頭

無題

遠近船中寫客愁高低水上著漁巢晩唐詩咲
晩春雨蜆蛤一籃賣島郊

遊大徳寺

喝雷棒雨響西東知是高僧住此中野性由來
無箇事痩藤挑月倚秋風

與某人

昨杳子通信於足下余以不知不問震良實出
意外非慢即今就安告余有足下無妄之疾余
愕然蹙頞攢眉欲往以問則人事不得止甚乖
素志且命就安代余而言想其有勿藥之喜念
在茲委曲告報則余亦安心恐病餘労細覧而
不渉繁弊亮昭

次前博陸藤相公韻
竊惟吾朝往昔君臣兩神之苗裔久雖保社稷
百王之誓已過三台之政漸衰猜鹿爲馬之匹
頗彰澆漓之風可嘆哉
前博陸藤相公避難於海南屢見遷玉座者有
年於茲以故聖朝天書累徵不休竟茲歲春之
孟忽欲艤舟車乎京華到番之津客館數日
恩情之優渥無貴無賤矣也趨走於庭下辱拜
手顏寵遇之厚不勝屏營之至贖出示試春之
尊吟求拙和予元是江湖之散人鴎鷺同群空
採釣竿豈手筆硯愧赧有餘雖然高命不允漫
綴兩篇奉呈陪從宗臣長盛卿旅床下拝下情
以献其壽云
一朝沛落豈其天來繫舸程万里舩是可江南
爲梅早漁村客舎共留連
十歲風光客裏天海波初穏艤歸舩春來君亦
春雲上再見宮槐新緑連
題無盡金泥扇
城中寸土如寸金幽軒栽竹唯十箇此是僧清
順警策也予頃在城裡未得寸土况幽軒乎十

竹乎吁已哉今視此扇子十竹琢玉寸土布金
誰欲景慕順者駕言于以為竹卜鄰而一諸重
於金節堅於竹公其許否

慶長二歳之春遊東山大佛口號

長篇閑語雜華麗本地風光吹報身三七白中
不吟盡東山又卜白櫻春

答姜沆

復姜負外足下前白在伏見日枉芳洒意音戀
戀開闔不措然飯程忩忩不載謝答人事不在
意似慢非慢文獻通考留付香子以傳足下盞

為偏旅館無聊殊方異域面友尚少況心友乎
書策中之古人獨非尚友哉呵呵今辱恵手書
書中以語語不通為恨至情至茲感佩不可言
雖然古云目撃道存言不盡意意若有誠則於
物尚感通人之至靈豈待言哉然則言之通亦
可喜不通亦不恨想足下為奈之後次所諸之
高記勞矣年遠疾以成多可多可唯以見晩為
歎急有介信必付以賜之餘蘊俟再労不一

并畳前韻謝來恵 前韻在別巻答朝鮮僧惟政松雲代長嘯子之
詩也

絶俗無塵客舘庭高人偃蹇似山青珍藏書帖
重嘉惠一宇山房六曲屏
講莚務式　書而以賜去同
一經書講莚以懇欵蒙允容三事相並豈不思
報恩謝也哉
一若句讀義理有過誤則相共審問明辯而自
他有益退有後言私義者是乃小人之意必可
慎焉
一祝髮之徒者可衣十德蓄髮之人者可著袴
肩絹是亦我邦俗禮百行之一也

一雜語戲笑私語睡眠一切須停止率次不論
貴賤老弱以來時之先後爲序蓋免當時之冗
擾也
一師傳耳提口義等奧賾和訓於志不篤者叨
不可漏言矣中人上下者先聖之格言也孟子所
謂挾而問者並想焉
　與某人
西疇居士崔子方所著春秋經解拙
所未見之書也聞或者之所藏而价或者之所
乞借焉即今來視矣蓋不拘於三傳頼已見而

解也雖未及識聖經情理之所在之當乎否乎
未詳彼採錄何人彼卓見特立不可啻焉册僅
五葉亦五六十也甚簡易草截以是較之云李
彭山之私考者渴之望梅而饑之甘糠與拙饑饑
渴于書者也所見不多於是屠門之大嚼也龜
鼎之染指也及未見則以為奇書而思与人共
之癖已可咲矣以此書告足下白豕而芥之与
暄也又可咲矣足下若欲撿此書則今日云暮
明日來至否下揭竢焉

與十方院号松雲軒

手牘殊更土產之明箋貳束千張芳志之所推
不耐感激就中明年之事必待而已及黃昏閣
筆頓首頓首

又

源廿九冊到來適當之至也右將軍之事靜可
不談合少允不克羅縷不宣

又

芳野之花一覧之由不勝羨殺華箋三十帖惠
意不淺萬般明白近隣枉紆玉趾云云必寄聲
所布御也多多期對顔之時耳相々相々

又

此一策得其意今白雅候奈何嚴寒料峭自嗇

珍愛

又

紅橘一盃之惠令賞翫明白午必可參詣三清

在即帶龜三相同今夕之事遺恨尚期來日不

縷

又

昨日預手札依他行不能回報源繪一覽達本

望餘事萬萬胥會談

又

來東殊更淸樽鯉十頭受嘉惠之至也萬般期

面晤

答節卜

手東廿紅橘如數惠來卑志不耐謝先白來訪

對客而東龜遺恨有餘他後期來臨之次不宣

與玄圃

自播州都勾一幹脩程之惠既費丁力厚情有

餘矣東行何之日萬緒會次演之不悉

答長皓

忽枉來書昨日空谷跫音多幸多幸就審銅仙
詩稿如干巻還納之且又昨日所製之小詩文
一首唫詠慚汗目前留在几上萬般再來訊之日
話欄耳

○維天卯之夏有
詔召洛下之僧徒於御前献大蓬莱假山右之
詩古人曰莫道文章不直銭布衣親到玉
皇前如走竊聆衆作之盛美雖傳自於弱
水三方之波而馳意於蓬莱五色之雲奇
哉快哉偶亦一日在甘露寺經遠之亭游

筆記一時之實事聊寓所思蓋孫綽之天
台牧之之阿房以想像賦之人尚有議者
況走乎見者怨焉
莫道假山拳石頭若非蓬島定瀛洲清風不借
蘆仝椀物外何求徐福舟五色末雲蒼蘚濕脩
齡幾歳緑松侔肯聞鷄犬亦仙去天上塵間易
致不

文禄甲午四月朔日乃 三品相公十七
年之 正諱也偶在逆旅不耐震悼渉慕之
至欽書小詞三章其一者嘆客中不能設

祭奠其二者假古人冷泉鶯鳴之句別寫
意其三者有兒孫非幹蠱之器空吾翁一
生之本志失吾家萬代之道統是可忍哉
聊漏哀情之萬一頻冀　靈感

十七年來憂更憂異鄉異客泣啾啾薦新禮典
無因備槐影夏總麥已穐
逝者若斯曾不留死生元是自浮休冷泉泉下
乾坤濶中有主人閑似鴎
吾翁常戒道長存不墜家聲以報恩手澤猶新
書帙散生憎愚妄悪兒孫

不盡山

白地西施白雪山曾聞欲富士夫顔他年我亦
鴎東子携去應遊宇宙間

熱田宮　揭牓題海藏門三字蓋遍照金剛大師之真跡也

五色雲隨望眼過蓬萊闕下鎖仙娥蹈破唐朝
早帰去海藏門前双襪波

清見關

清見關前暮景濃沙汀潮荅寺樓鐘天衣疑是
未帰去一抹雲懸三保松

武藏野

武藏野廣往無窮四顧蕭蕭草掃空方處轉迷頻指點日殘西復月昇東

又

此行武野去忽忽有約再遊情豈空春入燒痕鳴草鳥秋添涼色響花虫

由井濱

萬竈烟籠蜑舍檣洒潮鮮鹵日相添汲時掠月爽睛雪渫亦才高不道塩

又

有山如赭無薪取物産怪看肯不常最竈炊烟

非桂玉旋燒黑石煑黃粱

大磯虎石

有石相傳虎御前大磯遺跡旧因緣若逢李廣掣身去沒羽箭頭聲響遍

文祿癸巳試筆

春縱一日四山霞霞彩連遍物色遐千紫萬紅胸宇內見花還孰與思花

又

究風和靄滿身春一日咸新心亦新消盡寒威如究已迎來陽氣似歸仁

壽而新居雪

頭白書林燕雪堂堂成雪下洗詩腸風沐今日
不吟盡天以斯文屬我郎

文禄丙申和壽耳再疊韻

籍甚京師百萬家新年景象競豪奢自今春眼
言吾志六七人童處處花

西山之有小倉者其地深邃爽
朗自古隱逸之士所盤旋也上
人西行納言定家營別墅結屠
燕者不可勝言一一日拉韻人宗
隆訪玄之之讀書之齋采晩涼
踏晴月散步閑吟見先賢遺蹟
之次李翰林之今月古月之嘆
來往于懷因記小詩與隆玄二
子且為再遊之起本

小倉山下屢經過聞說先賢行樂窩今夜坐來
古時月月搖松竹亦和歌

和棋菴由巳詩并序

予見倭俗近時之竊有疑尚矣夫古人之於詩
也所評所判為工為巧為奇絶者与今時之製

作評品決不脗合故疑之或曰詩之為詩也有時勢之変有諸家之別予以今人之不合古人諸家之不同一家疑之者陸之舟水之車非愚而狂哉予曰以時変以人別者實然也所以為其好不好者實不然古今彼此宜有異哉其猶柤梨橘柚味各不同而皆可於口其不可口者非正味味不同者古今之異也諸家之別也可口者詩之好也不可口者詩之不好也論以至此其疑彌深其惑益遠雖然予素不學詩何能辨其惑決其疑哉吁止矣文已之叟予隨黄門

秀俊卿遊肥之前州名護屋之海城楳菴翁亦侍相國公之幕府嘗公事之暇一日招予閑話話未盡璧陰之窓漸昏灯雨之床将曙之頃一小虫翩翩然入座偶撲灯火翁捐點賦一詩示之落句曰書窓話盡十年雨咲見夏虫來撲灯予不覚手舞足蹈問曰翁詩何似古人杜先之注目寒江倚山閣蘇氏之咲看飢鼠上灯檠黄氏之出門一咲大江横比比与翁之句如模脱出奪胎乎換骨乎抑又暗合乎於是益知或者之言之妄而予之疑之有徵從前來憤悱之

懷不落而尾解疑團之心不破而氷釋因始悟
今時之詩小巧淺露而多爲用事屬對所牽強
失優游不迫之体却謂古人之詩甚不工蓋知
鏤氷文章之爲工巧而不知著水塩味之爲容
藏者也耶蒙莊之言云日鑿一竅七日而混沌
死於詩亦如斯欲意也体也于首尾于胸腹欲
鑿之不至死句者未有之活句乎活句乎艱混
沌之徳者非翁而又誰欲自今從翁於吟杜而
講磨風月消遣世塵則於予益亦不爲不多以
予之晩生莫排斥好矣更贅元韻抒下情其詩
曰
如翁真箇是心明佳句幸哉能及僧雨入吟脾
清幾許飛虫影暗一床灯
見付紺屋孫尤市隱
把茅菴自小豊草徑纔三塵外千金篇世緣半
氈藍
十六歳時贈友人一二句遺忘云云
江頭潮信秋風晩子細題詩爲寄聲
請天滿之菅廟延筆書小詩聊充贄礼蓋
有思夢觀之舊詠因及茲

偶謫塵中亞聖才元知天上一靈梅花其文思
實芳德六百年來又幾回

病餘立秋口號

聚散無恒世態恒病來辜負舊交朋新秋涼意
起予者萬卷簡編一盞灯

是尚窩記

是尚窩者日東儒者歛夫之窩也其所謂是尚者何也予嘗聞孟子之言曰一鄉之善士斯友一鄉之善士一國之善士斯友一國之善士天下之善士斯友天下之善士以友天下之善士爲未足又尚論古之人是以論其世也是尚友也夫以一鄉一國天下有其士孟子猶以爲未足爲友況以一鄉一國天下無其士乎夫以孟子之時去古未遠而猶且尚友古人況以今之時与孟子之時又加相遠乎所賴古昔聖賢之

生去我者雖遠而古昔聖賢之心迹布在方策今歟夫盡得以誦読之諷詠以躰之涵濡以得之晨夜於其中坐卧乎相對与稷契皐陶伊虺周召揖譲進退於典謨誥命之中与騫牛雍陽游夏由師升降切磋於洙泗杏壇之上歆聞入德之門質之於孟子歆得性命之原聞之於子思左手拍濂洛肩右手挹紫陽袂和風慶雲泰山巖巖盡爲責善輔仁之益友則地之相去也雖隔萬有餘里世之相後也雖隔萬有餘歳而吾之所聞者惟古人之言所見者惟古人之事

所行者惟古人之道吾之一心即古人之心也一身即古人之身也所居之窩者即古人之窩也則是窩之得名是尚其知有所取於斯也乎嘗聞日東四大姓藤爲之宗又嘗見宋太史景濂詩有曰豳城甲第競豪華者是也自曠古世攝國政以至道長長五世孫京極黄門定家以道德文章顯十一世孫参議爲純是欽夫父也以王綱不振亂賊横恣自幼隱居不仕以道自樂阿堵一世人物渺然則欽夫之所友舎古人其誰哉嗟乎余是遠人也自結髪則對聖賢黄

卷中嘐嘐然嘗曰古之人古之人而今者不幸旅寓於絶域之中偷生假息所闕一死則於古人成仁取義之道何如哉幽明之間太宮良友聞子之道汗顔哉何故爲之記發揮是尚而因以自懼焉

萬暦己亥朝鮮刑部負外郎菁川姜沆記

五經跋

夫子之賢於堯舜語事功也所謂事功者何也繫三聖之易而天地萬物之情顯編六體之書而二帝三王之心法著風雅頌删而善心感發

逆志懲刱禮樂定而神人以和上下以辨春秋作而亂臣賊子有所恐懼使萬世之人君君而臣臣父父而子子夫夫而婦婦兄兄而弟弟立極乎天地立命乎生民開萬世之群蒙啓萬古之長夜則夫子之事功豈不賢於堯舜哉聖人既沒聖言遂湮瑞曲絃絶寶匣塵生九師起而易道微三傳出而春秋乖前孔後孔之書止於傳註大戴小戴之礼守其口耳以及於康成之詩箋平叔之論語章句而已耳標題而已耳曷嘗能得聖人之影響哉五百餘年而後僅得二韓

愈原道之書及遺格物致知餘子何足論哉昏
昏紛紛詖遁支離君子不聞大道之要小人不
蒙至治之澤以及於五季之末壞亂極矣宋日
中天文奎呈瑞濂洛群賢蔚蔚亦輩出尋千載
之遺經續千載之絕緒程伊川傳文象而易道
彰胡文定傳春秋而王法顯拔孟子於十子之
中而人知攢天理正人心表庸學於戴記之內
而士聞入德之門性命之源以及於紫陽朱夫
子又集群賢之大成而一之上自五經下至語
孟庸學莫不發揮而章顯之使學者知此道之

不外乎日用人倫聖人之質可學而至則宋賢
之功又豈下於堯舜哉扶桑海國也去中國道
理遼絕士大夫未嘗以經訓名家又豈嘗以窮
理正心實用其力哉其以幸而儒術聞者亦不
過何鄭註疏謂程朱之訓解為無用其不以覆
瓿者為鮮矣千百年始得惺齋歛夫一人窮約
自守不求聞達惟以文籍自娛其學深造獨詣
一以操存省察為本經書洞悉曉析獨以程宋
傳註為是舉一國莫有知者而惟赤松公以蔑
莩之義荒葛焉因以其肯書五經四書亢頴窮

玄積成卷軸焚膏燃蠟又卜其夜既卒業乞予序其末予應之曰嗚呼堯舜之道非孔子則不能明是無孔子則無堯舜也孔子之道非宋賢則不能行是無宋賢則無孔子也日東之人不知有宋賢惟斂夫表出之是無斂夫則無宋賢也斂夫之志非赤松則不能成是無赤松則無斂夫也況予嘗聞赤松家世日東王室之胄也世襲貂蟬奕葉蟬聯綺紈襦袴朱邑達城馳馬試劍長金積玉乃耳目之素所慣也而隆師親友進德修業乃至此刻苦眞實則豈非日東斯

文之幸哉他日日東諸達官之見是書者因其文而悟其道以及於爲上爲下爲國爲家爲比隣一以聖訓從事則扶桑一域未必不爲東周哉斂夫之仁讓可化一邦之獷俗豈但與行於赤松公一邑哉予嘉斂夫之獨得遺經又喜赤松公之尊德樂道也於是乎書

巳亥春二月望日

朝鮮宣教郎前刑部員外郎菁川姜沆謹跋

惺齋記

自予之落日東者三年得歛夫於日本王京與之遊者數月始知其爲人而聞其爲學焉既聞其爲學而益信其爲人焉其爲人也隱居教授不求聞達人可聞而不可見可見而不可知也簞瓢陋巷處之裕如義所不可雖千駟萬鍾有所不屑也疾惡如風見善若驚道所不合雖王公大人有所不顧也其爲學也不由師傳不局小道始於佛老之學得箇昭昭地以其心迹背馳終弃去不爲而因千載之遺經繹千載之絶緒深造獨詣旁搜遠紹自結繩所替龍馬所載

神龜所負孔聖所藉近于濂洛關閩性理諸書靡不貫穿馳騁洞悉曉析一切以擴天理收放心爲學問根本其所居精舍扁曰惺齋人莫會其意予聞而喜之曰我知之矣茫茫堪輿俯仰無垠人於其間藐然中處參兩儀而爲三者以其有是心也是心者一身之主宰而萬理之所具也萬事之所應也性情之所統也舍是則人豈得以爲人哉雖然是心者一活物也虛靈不昧遷動難安出入無時莫知其鄉其或耳目之官失其所司且晝所爲有以梏亡聲色臭味鑠

於外喜怒哀樂動於中則放以須臾走以千里人之一身如一空室主人翁既去其所而魍魎魑魅反為之主与禽獸相去者詎幾何哉惟聖賢知其然也故存養省察提撕警覺揆撥此心夫常惺惺天關泰然百體從令洞然八荒皆在我闥此昔賢所謂常惺惺法而欽夫之所以名其齋也嗚呼古往今來孰無是心而心為形役舉世同然有放而不求視不若雞犬日夜之所息又盡於牛羊則豈不可知之甚而惟欽夫獨以收放為事惺惺為法則欽夫之學可謂先立乎大者其小者豈能奪哉嗚呼三千之徒蓋莫不聞其道而獨得其宗者曾氏之傳也程門群弟子蓋莫不親炙而不失其正者尹氏之子也今欽夫乃於百王之季窮海之表尋繹微言慨然自奮真實心地刻苦工夫者乃能如此則滄海之不能隔地脉有如是者豪傑之士不待文王者孟子豈欺我哉叔季之人知欽夫者鮮矣則予雖遠人而勢不得以不言也故為之記以俟夫後世之子雲焉

萬暦已亥

朝鮮刑部貟外郎菁川姜記

追悼文

絶句二首敬悼　道春拜

此内藤先生

尺恐天將喪此文自今謦欬不能聞兇嵐一夜

秋風夢月隱中庭草樹雲

幾代儒宗奠廣胖一朝永訣惱心肝風吹羅帶

大林谷此亦幾人垂涙看

五言排律一首奉追悼焉　道春拜

先生忽奔群歸去帝鄕雲淨几五更燭深衣十

幅裙異端能早辨吾道既朝聞和靖無封禪陶

潛有斉文幽閑知獨樂清酌發微醮瘵胥人同
歎誅心臣弑君雅風排鄭衛後代接閑闢學術
淵源遠論談涇渭分若非來扣問爭見往謦欬
肯在西鄙歲研朱點典墳近遊南紀日鐫石勒
神勲韓杜豈遺恨柳顏如得觴詠泉高韻久倭
國咏歌芬形像留閑畫靈魂揚盛烈青雲擬側
帶猶待聘玄纁黃壤俄埋璧亢悲行寳熏命哉
天黙黙逝者水沄沄明信以時祀澗毛可薦芹

滕先生

敬悼二首

周垣拜

別後闇然死亦憂曉來露冷九原頭十年夜雨
兩行淚更覺長安落木秋

悼

惺窩師挽詞　弍絶　　昌三拈香

千載真儒道學存天乎喪轄泣招魂何看霽月
瀼溪水難遇深衣獨樂園

避俗居閑京北邊已成陳迹涙漣然身隨黄落
忽鎖去子葉孫枝他後年

元和五稔秋九月日

悼

滕歛夫先生擬挽詞一首 并叙

自從八歳入小學學六藝之文以至終身也不可一日無師矣何則師所以立教以明大倫也故古者有天師之號後世有太師少師之官此天子及太子所以不廢師也古者有庠序學校之名後世有府學縣學之稱此所以使下受教於師也無介者則不見行束脩則教之所以見受教之嚴也無犯無隱服勤至死所以事師也心喪三年而無服所以喪師也酌是觀之則弟子之於師尊也兼君恩也兼父交也兼朋友歯也兼長者可不盡心乎至宋儒又謂如顔閔於孔子雖斬衰三年可也宜哉其成己之功有隆殺也哀毀亦從焉若夫逢蒙不足言之僕初見

滕歛夫先生八年于今矣是歳秋九月十有二日以疾易簀悲夫先生不能盡弟子之礼死不能終弟子之喪蔽於習俗而至如此固不能自懺嗚呼噫嘻

先生之嘉言善行人人無不知之所謂四海[illegible]生口是銘者乎況至作碑銘墓誌行状年譜

等則不亡之其人非予所得與也故惟賦唐律
一篇聊寓慟哭之思也以供
昭鑒
白雲有路到蓬瀛空築孤墳在北京議論彫
零天下學聲名籍甚世間傑西風滴淚念經
顛南畝發吟布孔明餘澤海深何所報爐香
一瓣為
先生
敬悼
已未秋九月十八日　門人那波道圓九拜

北肉勝先生哀詩二首　杏菴法橋正意拜
天恐綱常將晦湮能令斯道與斯人俄歸華表
千年鶴罕見中原一角麟六籍復明排異教九
京不起泣生民溪毛萎盡秋風暮更以燕詩代
白蘋
漲起關閩濂洛派風波忽駭不藏舟餘哀感物
千行淚尤恨林間黄落秋
奉悼
藤歛夫先生綴拙詩三篇以備
靈鑑　菅玄同肅奇

藤氏芳聲徳亦馨堪憐五十九年齡定家卿後
斯人在墳墓卜隣時雨亭
悲哉白日入虞淵間出賢材五百年松竹先生
貞節操龝風無頼歳寒前
文星落碧空世道奈汙隆貞没葛墩下（葛墩ハ惺窩公ノ別室ノ號也）
名存桑域中黄泉埋玉樹紅涙滴金風前
子僉心喪三年豈有窮
元和五易草木歳在己未九月盡渉毫於生白
室下

長嘯

[illegible]

たかれとのむつましさもて文かよはし
都鄙へかさねて名をやうしなはし
すゑすゑまでもはぢにならすうらのやとなり
をみなそへんとおもひしかとも其の
えたるめでたき人ならばともなひて
きゝすれおもふてかふるへしとせのある
かたりはましきかなる泉からゆきてやせいく
うつくしきものかなりとて何ともおもはぬ
きたらく文 背乃山人と号する人へかよひ

おもしろやかし箕の尾張の家の中の
二日なからもとけくかもしきひとつおきさ
吟とおなじく八月ふかねつひてもあしたゝけ
おそらくはめでたきこえつきつゝは宝家
ゝの部ともに植村あの亭ならやいなかう
我まてさめなうかうけれどもさもつけ
あいひなやことによろこものわかし中れ
吟のうちをたゝしあまりぞて一夜をのせす
たれ八をひとて三ちゆんこもへ家

ちゝくぜんられなしなくかまりそふ
うりふらしの雲秋乃やよ
かくれてもえうすいし悩めいせむ
あまりうつゝてくそくげきくもつひきち
そまへろうせる酒とのふゝんしよの雲林
とそらのたぬ人おもうきんやまとおもれ
あのとふされかいちとかゆくゐとく
ゑふうこうんしよのくやあれ
かゐくすくとも行つい　おとすうがねく

弟子くまりしとつひ夕のせくしのうち
乃しめされ又ありき奥おもふく　おか
ゆめさせかうやかうひいつ経さえか人乃
かなうそむそふよましし後教のおかき
さんちせうそもくのそみなさ乃ちあおき
彼らみをつひもうふも何いたて高く
いかう寝めろうくるし夜とのこともえをせ
ゆふつきとちをおもれよほくなれ
識はなるくつひそやし人そくありるれ

ぬしとよしかしあとうちうくうしきやく
乃ことまてわきまへしらいひいつめ腹た
せんかたなさいやしきわうまさかあかいそう室
ならさへつらしわとわつさられ子まて留く
厳なりけり文角あらきそう甚藏のめ法
つさ家かつさおかおてのそのあさきい女
思ひきへまうく人ハいそちうひなとそておて
すうら忘文入江乃かんことをうちかうみあく
つ花ささつてくんの作くまりのあり六十は

とおとり分りまてうぬよろひよそてうせか海
あうさへまてそのみちおふ与こなくお
りせしうひさ程あらえん世の中ゆて
然うきつ所ともあくるのとさおねと
引うてひらをのまりられかしこせ
うちゑすつのよ名すへるとわうさ
名乃を所よおはひふろうえいみそれから
てつるてさやかなるつるてまや孫こ
あらくゆようへなんいわさまし何氏か何せん

爻乃その二の卦のふかれならてらみ乃
まつしまふ志らすもとちらうんしよはや
海さうらんし三乃ちへらさ又のみと
乃をゝかなかみとのうをまとうつ
ふかみちもおよ百の家の文千ゝの
まさく梅くはしかおちりけてやむ
よくおしかのおしきそうほてなさりむ
たくうくおさらもおさやかにのめひ
とのならうとこまやうなしかく

かくて八雨風たえひてめをとはりみよりて
色こ霜をかね南の海よわうひて赤人う
ちかけみやらて積をまとりのしうらかくなさ
松をかけのむかしをちむ玉津嶋入江崇
水よりてこう月のかよそ波みそく蛸の
からまうひすよて忘うて起をうひかれ
なきうとまれなるちもへしるにつ雪三扇
菅氏沼なき御すゝめやそうしらふうしきた
てあけのむかしさまそれてむかしのつさ

そきゝしむかしひさしきちきう碑の文
はくゝまりしくにゝとうしあらて相如
長門ふとかきしいさゝかのふしを残さすも
やの於ふかくしたうとかとまへぬなの
つゝしかさすゝへて都府楼のうきしへかゝり
乃うあはれふかく海あたりかきあしらひあの
むかしをおもひこれそのうらみの冬を
ぢうもことぞせしそ事ともあきむかいかむも
ろけかゝすらえぬくかくさき跡

ちりの代にふかく千すけ氷よりもさむきにまされど
くちて家をはなれぬ事をとりて四夷の文をせ
るすとすといへるをとなふるそのことくく
かなしけるよや日乃りとれあさましき事の
せかむしまきてもいふかなる辞ありけるん
もゝらきと孔門の哀れなるをきこえ海とる
乃ことの詞からをはなし置かくせるゝ海
くとむかしみそさりてせまはさとまへると
又るかうちりあつめ此人の思ひを残つるや

京極乃黄門をしたしまの言葉とこそれハ
いつきの人かたらひせん移りてたかきを
ちよそてあやしきよの名えりたしせまく
ろへらか梅さくとをきみつしらかくろふ
す猿かまやあらんしのひあまり猿ふくハ
おとかいりそもぬるまほくしかるまてひ
てをしつかのまき乃津の浪てきありきますけ
らはうやハあるらちふちちかへあるとかう
そひよくこしハさ家をみえて三十かうち

のよしこ涙そいてハひすら誠積のあそれかん
とうふしらるりて青乃花のこゝろ
なるあしたも上のかたふさそあひて
落れむしろよおとぬ秋の月乃さそふさ
ゆふへまねくも花の袖ふらそへても
とのよ草にいかえれあひ人まつむしの声
こそかくよけさそ消てとふらひそひよ
とをらぬきかくるもあれをはくらし
たちしもひまもとにま猶あさとかまれ

ことのひゝきたみういはすはへちうしく
んのちらもかきりしひ萬まちゑせんされぬ
ともかうふかくへまやあらし世つきの翁ゆき
やらんも大いね丸かけひくやてそしけ
風うらによみちもやとくようつくしい
きくふおらましかの人あさへかふあし
まけるかめる折らよつせはおつ筆つ
かきうりそんむつさハ清とらて清ぬ
ちらえんいろしるぬよる人まてしお筆は

祖と折をみかいくはくれかまぬましく
かきらうはうやさのらうもそをいふ亞
くやあう祝をとりうめ下池乃ちらう松か
ゑてくさきうけあうさもしつひとみつき
そりしきはえんえなしぬなまかりひくうて足
とうハてうしくみそのそうきみすもあれ
あうりてあのことふかおうこうしかゝまけさ
なちぬ門生乃二ちと也れ藤衣をくつゝやと
そ洞のものそともなくぬなるすしちをも歎

うらひ恋しのゆくゑそのくもの影をおか
さぬかららみもちかよせていてこぬけ
くみもかゆきて行ますもおかす
しらはおきとむものおもはくそのさ津
さくしくかちの橋を文つくりちらきさか
つくさの外をうちむしく高宮の山の雲と
なんそて袖のかすしらせやまへ入らん
乃関渡傍なくうきかの川のふけまもなの
あくてなふとまつともかく月乃出入りまて

三十八丁ハ
落丁ニヨリ筆写
昭一五、十

乳かはるなからひなきそみやそのかこれと
そらる絶して物をへくやさきこともうち
南しつるこのそれはほうかくいつまのとしや
らむまさつのおりねとすまき一むしき
まさ新ちらくえらきそて
たつなきに折てむしの音のはてなそか
一むしすきさうもそめしよるも
男をあくるをよすの山もあくるくそ
なきふかたえそれ庭乃まり川のを

おとつめのきこしあまさるのしこうてけとあや
向これわら乃すみるとこうふかのすな
松は枝の露若あかいのみさんせをまさへの
宿ありひやうく
霜八宿亜あのし枕もかたとき
なきぬる袖も人もみな乃香し
されまなと宿の松なむふらん
むるしきとのそとともきえもて
そりかきしそ乃書秋乃山から

あくさきもそてなみたをさらさひ
うらみしともへもいひこらそのつゝ
さきらハたてくれ乃まきせゆく
今ハとてゆふつ宿の袖と絲をそめく
くちす恋とのむすしもかれく
かさみとて乃ころもかさの枕そひ川
よし川いさし旅人のうきこゝろ
きのう身の夢のうちもおもはるもあて
は乃ぬまさきてよしのよへく

きのふまてありしをとめとひはれは
人もきえゆくし雲のたえてふ
まれ花ちらゆくなしみ秋乃月
つめをきよしくもこうた
月のゆくうきよの雲のかゝるむ

宇宙之間奈死生是天是命有誰争可悲一夜
文星墜秋氣俄摧藝苑英

又

三十餘年西與東往來如影伴春風交情未及

駐轜車空作挽詞聊報公
天喪斯文吾遊魂帰太虚威儀思俎豆容貌或
衣裾不用封千戸所貪書五車泫然雙袖涙何
日又能除

あきらかりしやよ月ハ昔乃かけあるゝ
えりきぬとしつきとゝろきん
おかしをのちつきほかりてあらん
よそんみ乃後のなきさいへきとはつ
まかりし

明心拜上

是やとかくこそれ文をくりかへしけるに
そめしかへの心くへらさ十てさありし六
乃れ时ま、けふ於らそのくち愛をいふめ
雲をせつむ人於さへの名をかれすひかろ
ちう林ふ志るさ夫乃るのことく於いまれ
桂乃えて之れてふぬさ於人いてたゞ
厳戸れれ子い十也七よ清をひろたて世
をまちこちろ於られみをいちとや

ぬ乃於代の春をせ志るし吉備のかたく
れ门をとしへふ於きのらむしろへれよみ
えぬ文よみなるかれて大しふのてれ於
旅乃中つてさの於於さみ佐乃事への
家の於とて小乃文をれて於て卿い空乃
舟をえうなすえ亭ゆのへしよを佐つ
まろうしれてふい是ちうさよふ志一
條の大ぬしちう又百とせふ一度うそき
人いつゆとこへそふのて佐は我なるて

ゑそやとのこまめしさうすむかゞくまい
桐はさとあれなる毛おしをかくせし數の
角おかゝる宴お指の山人といふ人あり
男ありこゝろのうきをむすひとして今の世お
あらゆる文みのうしあまりおもとしくあるに
あさきをさてはまた棟あくらの色は半もあき
きへし見のかとやもよみうらえんまるいり
なかうれしみくたりしえんそのめことわりに
さしいくさそかのうらひをまめしか彼

康頼かゝるをへて說るよは告よといひし
志すの山風よしもとらきてそのかいさ寺
ちかひことおかくれ家もとめくたさしか
花よのいそみともおもの名世よかりつく
誰かひそめしあらくあくいふしへの人をも
吾くるし出きのし中まはしけ人のさうの
かみふかうむしとかつるへしとかむもてお
つゝひとみえてこゝへまてたつましかるを
わしも月中の二日九月よりお雲くさき

みをひめまくとに閻浮にすみてこそく
らりしかをうけすにやうにこゝにんにいへしも
をめくるのあともとくひきくわからるゝ
よしあしまてらく分地とをひしかるす
此ろもいとむかしいつしこうそうへしすらんれ
父母にをくれしもちをわすれ昔をせ侍
ちつそよく此さるをとをひあるをせけるを言
葉ろうさかしけうこ二まてをくらうさし
そをとやうて此秋のくるみにみえす侍

らむとはつ行とはさらさ行とめるさ
世におほとあるれいとあつぬとあら
秋もと又やまとうこ二うこ吹きてむひ
くてまつるとのあらし
人乃世をあわれとかのしあそ世限の
そのゝかうさふかなふふるこう那
とこきてぬ世のあまいようかゑれ
むかしかうし思月八いつくあるも

惺窩稿續巻之三終

承應三甲午歳仲春吉日
二條通鶴屋町田原仁左衛門尉梓行

秋埜